三帰依文

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてか
この身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。
自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
大道を体解して、無上意を発さん。
自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。
自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
大衆を統理して、一切無碍ならん。
無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し
受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

増補 真宗大谷派 勤行集

目次

一、正信偈（草四句目下）……3
一、念仏・和讃……33
一、回向文……49
一、御……59
一、同朋奉讃式　第一……71
一、同朋奉讃式　第二……85
一、浄土和讃……103
一、高僧和讃……165
一、正像末和讃……225

＊『真宗大谷派勤行集』（小判・大判）に掲載されている同朋奉讃の和讃八組（各六首）の本勤行集での掲載頁は次のとおり。

弥陀成仏のこのかたは（104～）　十方微塵世界の（144～）
南無阿弥陀仏をとなふれば（157～）　釈迦弥陀は慈悲の父母（203～）
専修のひとをほむるには（212～）　無碍光仏のみことには（241～）
弥陀大悲の誓願を（252～）　大慈救世聖徳皇（270～）

●●○

歸命　無量　壽如來
南無不可思議光
法藏菩薩因位時
在世自在王佛所

上

超ちょー 建こんー 國こくー 覩とー

發ほっー 立りゅー 土どー 見けんー

希けー 無むー 人にんー 諸しょー

有うー 上じょー 天でんー 佛ぶー

大だいー 殊しゅー 之しー 淨じょー

弘ぐー 勝しょー 善ぜんー 土どー

誓せいー 願がんー 惡あくー 因いんー

上

無むー 普ふー 重じゅー 五ごー

碍げー 放ほうー 誓せいー 劫こうー

無むー 無むー 名みょうー 思しー

對たいー 量りょうー 聲しょうー 惟ゆいー

光こうー 無むー 聞もんー 之しー

炎えんー 邊へんー 十じっー 攝しょうー

王のうー 光こうー 方ぽうー 受じゅー

上

清(しょー) 浄(じょー) 歓(かー)んー 喜(ぎー)

智(ちー) 慧(えー) 光(こー)ー 光(こー)ー

不(ふー) 断(だー)ん 難(なー)ん 思(しー)

超(ちょー) 日(にー)ち 月(がー)ッ 光(こー)う 刹(せー)

一(いー)ッ 切(さー)い 群(ぐー)ん 生(じょー) 蒙(むー) 光(こー) 照(しょー)

上

本(ほー)ん 願(がー)ん 名(みょー) 号(ごー) 正(しょー) 定(じょー) 業(ごー)

至(しー) 心(しー)ん 信(しー)ん 楽(ぎょー) 願(がー)ん 爲(にー) 因(いー)ん

成(じょー) 等(とー) 覺(がー)く 証(しょー) 大(だー) 涅(ねー) 槃(はー)ん

必(ひー)ッ 至(しー) 滅(めー)ッ 度(どー) 願(がー)ん 成(じょー) 就(じゅー)

浄土和讃

愚禿親鸞作

和讃は、宗祖親鸞聖人（一一七三～一二六二）が撰述された和語をもって讃嘆した詩。浄土和讃・高僧和讃・正像末和讃を『三帖和讃』と呼んでいる。

○彌陀成佛のこのかたは
いまに十劫をへたまへり
法身の光輪きはもなく
世の盲冥をてらすなり

智慧の光明はかりなし
有量の諸相ことごとく
光曉かぶらぬものはなし
眞實明に歸命せよ

解脫の光輪きはもなし
光觸かぶるものはみな
有無をはなるとのべたまふ
平等覺に歸命せよ

光雲無碍如虛空
一切の有碍にさはりなし
光澤かぶらぬものぞなき
難思議を歸命せよ

高僧和讃

愚禿親鸞作

○本師龍樹菩薩は
智度十住毘婆娑等
つくりておほく西をほめ
すすめて念佛せしめたり

南天竺に比丘あらん
龍樹菩薩となづくべし
有無の邪見を破すべしと
世尊はかねてときたまふ

本師龍樹菩薩は
大乘無上の法をとき
歡喜地を證してぞ
ひとへに念佛すすめける

龍樹大士世にいでて
難行易行のみちおしへ
流轉輪廻のわれらをば
弘誓のふねにのせたまふ

道俗男女預参し
卿上雲客羣集す
頭北面西右脇にて
如来涅槃の儀をまもる

本師源空命終時
建暦第二壬申歳
初春下旬第五日
浄土に還帰せしめけり

正像末和讃

愚禿善信集

○釋迦如來かくれましまして
二千餘年になりたまふ
正像の二時はおはりにき
如來の遺弟悲泣せよ

末法五濁の有情の
行證かなはぬときなれば
釋迦の遺法ことごとく
龍宮にいりたまひにき

正像末の三時には
彌陀の本願ひろまれり
像季末法のこの世には
諸善龍宮にいりたまふ

大集經にときたまふ
この世は第五の五百年
鬪諍堅固なるゆへに
白法隱滅したまへり